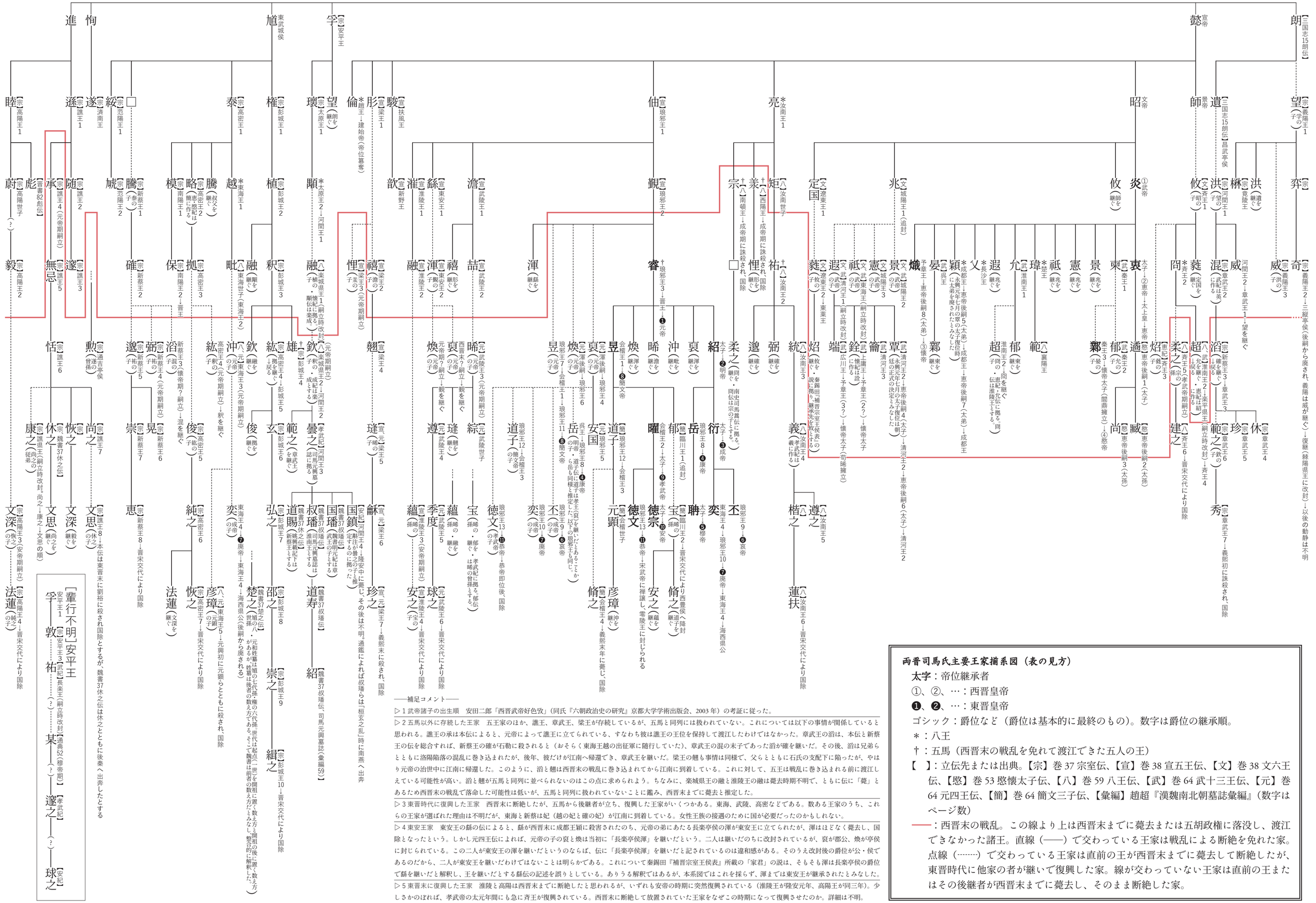
作成：長谷川大和（2021/11）



両晋司馬氏主要王家描系図（表の見方）

太字：帝位継承者

①、②、…：西晋皇帝

❶、❷、…：東晋皇帝

ゴシック：爵位など（爵位は基本的に最終のもの）。数字は爵位の継承順。

＊：八王

†：五馬（西晋末の戦乱を免れて渡江できた五人の王）

【　】：立伝先または出典。【宗】巻37宗室伝、【宣】巻38宣五王伝、【文】巻38文六王伝、【愍】巻53愍懐太子伝、【八】巻59八王伝、【武】巻64武十三王伝、【元】巻64元四王伝、【簡】巻64簡文三子伝、【彙編】趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』（数字はページ数）

――：西晋末の戦乱。この線より上は西晋末までに薨去または五胡政権に落没し、渡江できなかった諸王。直線（――）で交わっている王家は戦乱による断絶を免れた家。点線（……）で交わっている王家は直前の王が西晋末までに薨去して断絶したが、東晋時代に他家の者が継いで復興した家。線が交わっていない王家は直前の王またはその後継者が西晋末までに薨去し、そのまま断絶した家。

――補足コメント――

▷1 武帝諸子の出生順　安田二郎「西晋武帝好色攷」（同氏『六朝政治史の研究』京都大学学術出版会、2003年）の考証に従った。

▷2 五馬以外に存続した王家　五王家のほか、譙王、章武王、梁王が存続しているが、五馬と同列には扱われていない。これについては以下の事情が関係していると思われる。譙王の承は本伝によると、元帝によって譙王に立てられている、すなわち彼は譙王の王位を保持して渡江したわけではなかった。章武王の滔は、本伝と新蔡王の伝を総合すれば、新蔡王の確が石勒に殺されると（おそらく東海王越の出征軍に随行していた）、章武王の混の末子であった滔が確を継いだ。その後、滔は兄弟らとともに洛陽陥落の混乱に巻き込まれたが、後年、彼だけが江南へ帰還でき、章武王を継いだ。梁王の翹も事情は同様で、父らとともに石氏の支配下に陥ったが、やはり元帝の治世中に江南に帰還した。このように、滔と翹は西晋末の戦乱に巻き込まれてから江南に到着している。これに対して、五王は戦乱に巻き込まれる前に渡江しえている可能性が高い。滔と翹が五馬と同列に並べられないのはこの点に求められよう。ちなみに、楽城県王の融と淮陵王の融は薨去時期不明で、ともに伝に「薨」とあるため西晋末の戦乱で落命した可能性は低いが、五馬と同列に扱われていないことに鑑み、西晋末までに薨去と推定した。

▷3 東晋時代に復興した王家　西晋末に断絶したが、五馬から後継者が立ち、復興した王家がいくつかある。東海、武陵、高密などである。数ある王家のうち、これらの王家が選ばれた理由は不明だが、東海と新蔡は妃（越の妃と確の妃）が江南に到着している。女性王族の接遇のために国が必要だったのかもしれない。

▷4 東安王家　東安王の繇の伝によると、繇が西晋末に成都王穎に殺害されたのち、元帝の弟にあたる長楽亭侯の渾が東安王に立てられたが、渾はほどなく薨去し、国除となったという。しかし元四王伝によれば、元帝の子の裒と煥は当初に「長楽亭侯渾」を継いだという。二人は継いだのちに改封されているが、裒が郡公、煥が亭侯に封じられている。この二人が東安王の渾を継いだというのならば、伝に「長楽亭侯渾」を継いだと記されているのは違和感がある。そのうえ改封後の爵位が公・侯であるのだから、二人が東安王を継いだわけではないことは明らかである。これについて秦錫田『補晋宗室王侯表』所載の「家君」の説は、そもそも渾は長楽亭侯の爵位で繇を継いだと解釈し、王を継いだとする繇伝の記述を誤りとしている。ありうる解釈ではあるが、本系図ではこれを採らず、渾までは東安王が継承されたとみなした。

▷5 東晋末に復興した王家　淮陵と高陽は西晋末までに断絶したと思われるが、いずれも安帝の時期に突然復興されている（淮陵王が隆安元年、高陽王が同三年）。少しさかのぼれば、孝武帝の太元年間にも急に斉王が復興されている。西晋末に断絶して放置されていた王家をなぜこの時期になって復興させたのか。詳細は不明。